

わたしたちの地域学習

宮城県多賀城高

《2》

東日本大震災で面積の3分の1が浸水した宮城県多賀城市。地元の県立多賀城高校に昨春、災害科学科が新設された。学校全体が防災教育の拠点になることを期待され、新しい科目も誕生。教諭が考案した教科書に登場するのは、当時の新聞だ。(長田真由美)



宮城県多賀城市 仙台港(仙台市)の北に位置し、物資を東北各県に運ぶ物流拠点として発展。東日本大震災で震度5強を記録し、188人が亡くなった。海から1、2kmの場所に市街地があるが、沿岸部に建物が林立し、海に面した地域も少ないため海に近いという意識は薄く、津波対策は弱かった。臨海部の工業地帯や住宅地をさまざまな方向から襲う「都市型津波」で、被害が広がった。

定できる学校設定科目で、「家庭基礎」と「保健」の内容を網羅。加えて、災害時の衣食住、自然環境と人間生活との関わりについて学ぶ。多賀城高には震災で、自身が車ごと流された生徒もいれば、家族を亡くした生徒もいる。生徒たちは被災地を案内する国際ボランティアや、津波の波高を確認して標識を設置するなどの活動に取り組む、防災への意識は高い。防災を専門に学ぶ災害科学科は、普通科の学習に防災や減災、環境の視点を盛り込み、より深い学びにつなげるのが目的。大学や行政機関とも連携し、災害を科学的に学ぶカリキュラムを組んでいる。この日は、新井准教授が復興住宅についても語った。仮設でのコミュニティを維持しようと、住民と一緒に理想の復興住宅案を仙台市へ提案したが、不採択だった。住民の落胆した声や「被災者の参画が大事」とする専門家の談話を載せた全国紙を紹介しながら「この記事を書いた記者

生徒と現実をつなぐ



防災 記事教科書に



新聞を活用しながら、復興住宅で工夫すべき点について考える生徒たち＝宮城県多賀城市で

と現実の距離を近くする」と話す。例えば、「飲酒と健康」の章では、宮城県石巻市でアルコール依存症になった男性の記事を紹介する。記事では孤立感から依存症に陥る姿が描かれる。教科書の本文では依存症が増える背景や、支援の困難さについて説明した。「地元の話題も載せやすく、生徒にとって身近。新しいデータを載せることもできる」。「健康と災害」では災害関連死の説明で東日本大震災の記事を載せていたが、熊本地震に差し替えた。「普遍的な記事はそのまま、最新のデータは差し替えて、と臨機応変にできる良さがある」と語る。

記事の当事者を招くこともある。一学期「子どもの成長・発達」の章で災害時の保育を学習した時は、教科書に載せた記事で取り上げられた石巻市の女性を招き、一年生全員に話してもらった。被災時、女性は出産間近で、妹の家にいた。二十人の人々と救助を待ち、二日後に助けられ、その四日後に出産した。「避難した人々から「頑張ってる」と送り出された。人とのつながり、見えない力が働いて守られた」と女性。一年生大沼聖良さんは「近くの人の声掛けがあったからこそ頑張れた。大変な体験だったと思う」と振り返る。

小野教諭は「全ての単元で新聞を使えるわけではなく、試行錯誤している。活用できる記事があれば取り入れていきたい」と話す。

感度高めてニュース発見

優れた記事を書くためには、ニュースを発見する感度を高くしなければなりません。

よく特ダネを書く記者は「取材相手の話から、ピンとくる言葉がある」と言います。今回の漫画では、元

気にシヨキングする高齢の男性に話を聞き、「百歳」という言葉が鍵になりました。

ニュースをとらえるには、知識も経験も必要です。



新聞とわたし

五年生の春に学校のクラブで将棋を覚えてから、新聞の将棋コーナーに毎日載っているプロの対局の棋譜を切り取り、ノートに貼っています。後から見返すと勉強になるからです。実際に駒を並べるとプロの手筋が頭に染みてきます。今は八



福島健太郎君

将棋の棋譜切り取り勉強

冊目になりました。将棋コーナーのことは、お母さんから聞きました。それまでは新聞を読んだことがありませんでしたが、今は将棋の記事をよく読みます。最近気になったのは、対局中のプロが将棋ソフトを不正に使ったのかも疑われた記事です。将棋道場に毎週通い、いろいろな年齢の人と指しています。好きな棋士は羽生善治さん。将来はプロになりたいです。(愛知県碧南市大浜小六年)

NIE全国大会名古屋大会は、8月3、4日に名古屋市中区で開かれます。

